

ノーサイドのラグビー精神

ラグビーW杯日本大会で、「ONE TEAM」の合い言葉を掲げて、史上初のベスト8に進んだ日本のチームの戦いぶりは、感動の連続でした。

高校の体育の授業（55年ほど昔・・・）で、激しさとノーサイド精神に魅力を感じ、そのころから、ラグビーのテレビ観戦が、毎年楽しみでした。

2019年のラグビーW杯は、チームの有り様が、格別でした。

様々なスポーツの国の代表は、国籍が条件であるケースが、多いように思います。それぞれの競技に代表のルールがあるのも理解できることではありますが、ラグビーの国の代表メンバーは違います。

今回、六カ国の選手が集まり、過酷な練習、緻密なコミュニケーションで、ベスト8の目標を達成しました。

今回の国の代表の考え方が、これからの地球規模での私たちの生き方を示していたようにも思えました。

ラグビーにおける、この国のチームとしての代表資格は、その人の国籍であったり、おとうさん おかあさん おじいさん おばあさんの誰かが、日本国籍であれば良かったり、その国に三年間居住していたりすれば良いとされています。

ラグビー発祥の地 イギリスの選手が、各国から出場できるようにするとの考え方が、あったとも聞きますが、その地域・国のメンバーとして、一緒に住んでいる者同士がチームとして集まる基本理念に、これからの地域での、共生の考え方が重なってきます。

1995年南ア大会で初出場、初優勝した南アフリカの「ワンチーム ワンカントリー」が脚光を浴び、映画になっていました。

地域で豊かに お互いが幸せに生きていくことは、人種や国の枠を超えていく共生の人生観を共有することの様に思います。

2019. 10. 20

奥村 英俊